



Title	サハ語の再帰接辞・逆使役接辞・受身接辞
Author(s)	江畑, 冬生; Ebata, Fuyuki
Citation	北方言語研究, 6, 43-52
Issue Date	2016-01-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60791
Type	departmental bulletin paper
File Information	03ebata.pdf



サハ語の再帰接辞・逆使役接辞・受身接辞*

江 畑 冬 生
(新潟大学)

1. 主張の概要

従来のサハ語研究では、再帰接辞に2種の異形態-*n*と-*in*を認め、受身接辞にも2種の異形態-*n*と-*ilin*を認めてきた。これに対し本稿では、これら諸形式を3つの形態素(再帰接辞-*(i)n*, 逆使役接辞-*(i)n*, 受身接辞-*ilin*)として分析すべきであると主張する。この主張を支持する根拠として、接辞の意味と、その形態音韻的・形態的・統語的な振る舞いとが対応していることを示す。

2節では、本稿に関連する文法事項について概観する。3節では再帰接辞と逆使役接辞の振る舞いの違いを、4節では受身接辞と逆使役接辞の振る舞いの違いを指摘する。

2. 関連する文法事項

本節では本論への導入として、サハ語のボイス接辞(特に再帰接辞)の用法を概観するとともに、3節以降での議論に関連する母音脱落現象について確認する。

2.1 サハ語のボイス接辞

チュルク諸語には、同源で形態も類似する4種のボイス接辞(使役接辞・再帰接辞・受身接辞・相互共同接辞)が広くみられる。チュルク諸語の1つであるサハ語にも、同じく4種のボイス接辞が認められてきた(Xaritonov 1947: 174-180, Xaritonov 1963, Ubrjatova 1982: 253-274)。ボイス接辞はいずれも、動詞語幹に付加し新たな動詞語幹を派生するものである。これらのうち、本稿の議論に関係するのは、再帰接辞と受身接辞である¹。

再帰接辞は、2つの異形態-*n*と-*in*を持つ²。母音語幹に付加する際には異形態-*n*が現れ、子音語幹には異形態-*in*が付加する：*tara-n*「自分の髪をとかす」(< *taraa*「とかす」), *sot-in*「自分の体を拭く」(< *sot*「拭く」)³。再帰接辞が母音語幹に付加する際、語幹末の長母音が短母音に交替している。この交替は他のボイス接辞や派生接辞が後続する場合にも観

* サハ語(ヤクート語)はロシア連邦のサハ共和国を中心に分布するチュルク系の言語であり、その話者数は約45万人である。サハ語は膠着的な形態法を有する接尾辞型の言語である。本稿は、“System Changes in the Languages of Russia”(2014年10月, サンクトペテルブルグ)および日本言語学会第151回大会(2015年11月, 名古屋大学)における口頭発表の内容に加筆修正したものである。2名の匿名査読者からの極めて有益なコメントに深く感謝申し上げたい。本研究は、科学研究費「チュルク諸語北東グループ未解明言語の調査研究: 包括的記述と史的変遷の解明」(課題番号26704004)による研究成果の一部である。

¹ 使役接辞には、-*ler*や-*t*など8つの形態素がある。ある動詞語幹に対しどの形態素が付加されるのかは語彙的に決まっているが、音韻的な条件から部分的に予測可能である(江畑(2013))。相互共同接辞は、2つの異形態-*s*と-*is*を持つ。

² サハ語の接尾辞は普通、語幹末の音節構造・母音調和・頭子音交替などにより4~20種の異形態を持つ。ただし本稿では音節構造により出没する母音をカッコ内に入れ、さらに母音調和等による異形態を捨象し代表形のみを示す。従って例えば再帰接辞を-*(i)n*と表記した場合、-*in*, -*un*, -*yn*, -*un*, -*n*という5つの異形態を代表することになる。

³ ただし語幹末/j/が脱落し異形態-*n*が付加することもある：*suru-n*「メモする」(< *suruj*「書く」)。

察される現象である。

受身接辞は、2つの異形態-*n* と-*ilin* を持つとされる。ただし3節で検討するように、筆者は前者を逆使役接辞の異形態だと見なす。母音語幹に付加する場合には異形態-*n* が現れ、子音語幹には異形態-*ilin* が付加する：*savala-n* 「始まる」 (< *savala* 「始める」), *tut-ulun* 「建てられる」 (< *tut* 「建てる」) ⁴。

2.2 再帰接辞の機能

再帰接辞-(*i*)*n* には、「再帰」と「逆使役」の2つの機能がある。再帰化機能では「自分を」を表す他、「自分の身体部位を」「自分の所に」「自分のために」「自分用に」「自力で」等の意味を表すことがある。以下では、再帰接辞が再帰化機能で用いられている典型的な例文をいくつか示す。

- (1) *sierkile-ke beje-bi-n kær-yn-e-bin*
鏡-DAT 自分-POSS.1SG-ACC 見る-REFL-PRS-1SG
「私は鏡で自分の姿を見る」 (自分を)
- (2) *suhalluk xomu-n-an satuuu bar-du-but*
素早く 集める-REFL-CVB 徒歩で 行く-PST-1PL
「私たちは素早く荷物をまとめ、歩いて出発した」 (自分の所に)
- (3) *et-te buhar-un-an miin-ne is*
肉-PART 調理する-REFL-CVB スープ-PART 飲む-IMP.2SG
telefon næjyæ žaha-ll-a-bun
電話 向こう 指示する-PASS-PRS-1SG
「『肉を茹でてスープを飲み』と私は電話越しに指示される」 (自分用に)

一方、再帰接辞-(*i*)*n* が逆使役機能で用いられている典型的な例文には、次のようなものがある。なお例文では、(本稿の結論を先取りし) 逆使役機能の再帰接辞には ANTI の略号を用いる。

- (4) *sann-um xaru-m ættyg-ym buut-um*
肩-POSS.1SG 手首-POSS.1SG 腿-POSS.1SG 腿裏-POSS.1SG
kiniexe suh-un-na
3SG:DAT くっつける-ANTI-PST:3SG
「[馬上で] 私の肩、手首、腿、腿裏が彼にくっついた」

⁴ ただし語幹末/j/が脱落し異形態-*lin* が付加することもある：*suru-lun* 「書かれる」 (< *suruj* 「書く」)。

- (5) *komp'juter interneke xolbo-n-no*
 パソコン インターネット-DAT つなげる-ANTI-PST:3SG
 「パソコンがインターネットにつながった」

本稿では、再帰と逆使役は異なる形態素であると主張する。以下では、再帰接辞を含む動詞語幹を再帰動詞、逆使役接辞を含む動詞語幹を逆使役動詞のように呼ぶ。

2.3 類型的に見た再帰

言語類型論の立場から再帰を扱った主な文献には、Geniušienė (1987), Kazenin (2001), Dixon (2012: 138-196) などがある。Kazenin (2001: 920) は、再帰マーカーがしばしば多義的である (polysemous) ことを指摘する⁵。2.2 節で概観したサハ語の再帰接辞も、幅広い意味領域をカバーしている。

2.4 語末音節の母音脱落

サハ語の多音節語では、接尾辞付加の際に語末音節の母音が脱落するものがある。母音脱落を示す語幹は語彙的に決まっている。例えば同じ分節音を持つ動詞語幹でも、*kuruj* 「年を取る」は母音脱落を示すが *kuruj* 「ハサミで切る」は母音脱落を示さない。

以下では、母音脱落語幹 *umun* 「忘れる」および *taxus* 「出る」を例として母音脱落について説明する。(6b), (7b)に示すような母音始まりの接尾辞は、母音脱落を引き起こす。(7b)に示すように、母音脱落に伴い子音の交替が起こることもある。子音始まりの接尾辞は、(6c), (7c)のように母音脱落を引き起こすものもあれば (このとき語幹末に挿入母音も必要となる)、(6d), (7d)のように母音脱落を引き起こさないものもある⁶。以降の議論では、母音始まりの接尾辞を付加することで当該の語幹が母音脱落語幹か否かをテストすることにする。

- | | | | | |
|-----|---------------------------|-------------------------------------|---|--|
| (6) | a. <i>umun</i>
forget | b. <i>umn-ar</i>
forget-PRS:3SG | c. <i>umnu-but</i>
forget-R.PST:3SG | d. <i>umun-na</i>
forget-N.PST:3SG |
| (7) | a. <i>taxus</i>
go.out | b. <i>taxs-ar</i>
go.out-PRS:3SG | c. <i>taxsu-but</i>
go.out-R.PST:3SG | d. <i>taxus-ta</i>
go.out-N.PST:3SG |

3. 再帰接辞と逆使役接辞の区別

サハ語の再帰接辞-(i)n と逆使役接辞-(i)n は、見かけ上は同音形式である。Xaritonov (1947: 177) や Ubrjatova *et al.* (1982: 259-265) などの参照文法における再帰接辞-(i)n に関する記述では、再帰と逆使役は意味的に区別されるのみである。例えば Ubrjatova *et al.* (1982: 262) に

⁵ 再帰の多義性のため、伝統的に用いられてきた ‘middle voice’ という術語は却って混乱を招く危険性がある (Dixon and Aikhenvald, 2000: 11, Kazenin, 2001: 920)。Dixon (2012: 155) の指摘によれば、ほとんど全ての言語において再帰を適用可能な動詞の数よりも相互を適用可能な動詞の数の方が多いが、にもかかわらず再帰の方が相互よりも出現頻度が高い。

⁶ 子音始まりの接尾辞では、接尾辞頭子音により、母音脱落を引き起こすか否かを予測可能である。

は「対象なし再帰用法」(безобъектно-возвратное значение)に関する記述があり、再帰接辞-(i)nには自動詞を派生する用法があることを述べている。以下で筆者は、再帰と逆使役という意味の違いに対応する形で、振る舞いにも違いが現れることを指摘する⁷。

3.1 語幹末音交替と母音脱落

再帰接辞-(i)nと逆使役接辞-(i)nは、形態音韻的特徴に関して3つの相違点を見せる。

[1] 語幹末/r/の交替. 語幹末に/r/を持つ動詞語幹に、再帰接辞が付加する際にはr/が保持される。一方、語幹末に/r/を持つ動詞語幹に逆使役接辞が付加するものが2例あるが、どちらでも語幹末r/が/s/に交替する(/s/は母音間で[h]となる)⁸。

[2] 語幹末/s/の交替. 語幹末に/s/を持つ動詞語幹に再帰接辞が付加する際、例外的に/s/が/ññ/へと交替するものが2例ある。これらの動詞語幹のうち1つに対しては逆使役接辞を付加することも可能だが、その場合には交替が起こらない。つまり再帰と逆使役を区別しない限り、この振る舞いの違いを説明できないことになる。

[表 1] 再帰動詞と逆使役動詞の語幹末音交替

	再帰動詞	逆使役動詞
/r/ 交替	<i>kör-ün</i> 「自分を見る」 (< <i>kör</i> 「見る」) <i>saŋar-un</i> 「自分について話す」 (< <i>saŋar</i> 「話す」)	<i>köh-ün</i> 「見える」 (< <i>kör</i> 「見る」) <i>tünneh-in</i> 「転覆する」 (< <i>tünner</i> 「転覆させる」)
/s/ 交替	<i>aññ-un</i> 「自分を突き刺す」 (< <i>as</i> 「突き刺す」) <i>muññ-un</i> 「召集する」 (< <i>mus</i> 「集める」)	<i>muh-un</i> 「集まる」 (< <i>mus</i> 「集める」)

[3] 母音脱落. 再帰接辞を含む動詞語幹は母音脱落を起こさないが、逆使役接辞を含む動詞語幹は母音脱落を示す。従って動詞語幹が同一の分節音から成っていても、語幹中に再帰接辞を含むのか逆使役接辞を含むのかによって、接尾辞付加の際の語幹の音形が異なることになる⁹。表2には、筆者の調査により見つかった見かけ上の同音形式のペアを示す(これらは最後の1つを除き、同一動詞語幹からの派生動詞のペアである)。

⁷ 江畑 (2012: 106) では再帰と逆使役の間に形態音韻的振る舞いの違いが存在することを指摘し、両者が同音異義の2つの形態素である可能性を示唆した。

⁸ ただし、再帰接辞が付加するにも関わらず交替が起こる例外も2例ある：*oŋoh-un* 「自分のために作る」(< *oŋor* 「作る」), *ülleh-in* 「自分たちの中で分配する」(< *üller* 「配分する」)。

⁹ ただし例外として、再帰接辞を含むにも関わらず母音脱落を示す語幹が6つある：*sot-un* (*sott-or*) 「自分を拭く」(< *sot* 「拭く」), *tut-un* (*tutt-ar*) 「自宅を建てる」(< *tut* 「建てる」), *kut-un* (*kutt-ar*) 「自分に注ぐ」(< *kut* 「注ぐ」), *oŋoh-un* (*oŋost-or*) 「自分のために作る」(< *oŋor* 「作る」), *xah-un* (*xast-ar*) 「自分の体をほじくる」(< *xas* 「掘る」), *ülleh-in* (*üllest-er*) 「自分たちの中で分配する」(< *üller* 「配分する」)。また *ug-un* (*ugun-ar* ~ *ukt-ar*) 「ポケットに入れる」(< *uk* 「入れる」) は、母音脱落しない場合とする場合とで揺れている。

〔表 2〕 再帰動詞と逆使役動詞の母音脱落

再帰動詞（母音脱落なし）	逆使役動詞（母音脱落する）
<i>bil-in (bilin-er)</i> 「自分を知る」	<i>bil-in (bill-er)</i> 「知られる」
<i>buh-un (buhun-ar)</i> 「自分のために切る」	<i>buh-un (bust-ar)</i> 「切れる」
<i>sab-un (sabun-ar)</i> 「自分を覆う」	<i>sab-un (sapt-ar)</i> 「覆われる」
<i>ut-un (utun-ar)</i> 「自分を撃つ」	<i>ut-un (utt-ar)</i> 「登る, 上がる」

() 内には 3SG 現在の動詞語尾が付加した形を示す

表 2 に示すように、サハ語には少なくとも 4 つの「見かけ上同音形式」のペアがある。辞書では、Pekarskij (1907-1930: 466-467) における *bilin* 「自分を知る」と *bilin* 「知られる」のように見かけ上の同音形式のペアを別項目として記載する場合も無いわけではないが、多くの場合には同一項目として記載されている。同一項目として記載された例においては、筆者が示したような意味と形式の対応関係が明確に示されているわけではない。

3.2 形態素配列

再帰接辞は、逆使役接辞よりも生産性が高い。さらに以下では両接辞の形態素配列上の違いとして、再帰接辞の方が語幹のより外側に現れるという特徴を指摘する。

再帰接辞は他のボイス接辞（使役接辞および相互共同接辞）に後続しうるという特徴を持つ：*kör-dör-ün* 「医者に見せる」（見る-CAUS-REFL）、*tüh-er-in* 「体重を落とす」（落ちる-CAUS-REFL）、*bil-ih-in-ner* 「知り合わせる」（知る-REC-REFL-CAUS）など。再帰接辞はしばしば使役接辞に後続する。

逆使役接辞が他のボイス接辞に後続することは無い。むしろ逆使役接辞は、使役接辞とのペアにより自他両極派生を行うことがある。両極派生のペアは、9 例見つかっている：*iti-n* 「暖まる」と *iti-t* 「暖める」、*kut-un* 「加わる」と *kut-uar* 「加える」など¹⁰。

3.3 目的語保持

再帰動詞を述語とする文では、対格目的語が出現しうる。(8)と(9)から明らかなように、再帰接辞の有無は対格目的語の有無と直接対応しない。加えて自動詞に再帰接辞が付加することもある：*tij-in* 「帰着する」（< *tij* 「到着する」）、*olor-un* 「自活する」（< *olor* 「住む」）など。従って、再帰接辞が付加しても、項構造に直接影響を与えることは無いと言える。

¹⁰ 筆者が現時点で把握している他の 7 つのペアは、*alža-n* 「壊れる」と *alža-t* 「壊す」、*tarša-n* 「広がる」と *tarša-t* 「広げる」、*tohu-n* 「折れる」と *tohu-t* 「折る」、*xaju-n* 「割れる」と *xaju-t* 「割る」、*suh-un* 「くつつく」と *suh-uar* 「くつつける」、*üöre-n* 「学ぶ」と *üöre-t* 「教える」、*ut-un* 「登る, 上がる」と *ut-uar* 「上げる」である。ただし再帰接辞が両極派生を行うペアも 1 つだけある：*kubuu-n* 「脇の下に挟む」と *kubuu-t* 「挟む」。

(8) *aruguu-nuu* *kut-tu-m*
 酒-ACC 注ぐ-N.PST-1SG
 「私は酒を [誰かに] 注いだ」

(9) *aruguu-nuu* *kut-un-nu-m*
 酒-ACC 注ぐ-REFL-N.PST-1SG
 「私は酒を自分の杯に注いだ」

逆使役接辞を含む動詞には, *tox-un* 「こぼれる」 (< *tox* 「こぼす」), *kutta-n* 「怖がる」 (< *kuttaa* 「怖がらせる」) 等がある. 逆使役動詞を述語とする文では, 対格目的語が現れない.

4. 受身接辞と逆使役接辞の区別

Xaritonov (1947: 175-177) や Ubrjatova *et al.* (1982: 265-268) などの参照文法では, サハ語の受身接辞は 2 つの異形態-*n* および-*ilin* を持つとされている¹¹. これに対し筆者は, サハ語の受身接辞は-*ilin* のみであり, これまで受身接辞の異形態とされた-*n* は, 逆使役接辞の異形態なのだと主張する. 以下では主として統語的な点から, 異形態-*n* が受身接辞-*ilin* とは振る舞いの上で異なることを示す.

4.1 形態音韻的交替と形態素配列

3.1 節および 3.2 節では, 再帰接辞と逆使役接辞の形態音韻的・形態的な振る舞いの違いを示した. これらのテストは, 異形態-*n* を受身接辞であるのか逆使役接辞であるのか判断するのに用いることはできない. -*n* は母音語幹にのみ付加する異形態であるが, これらのテストはすべて子音語幹に関わるものだからである¹².

4.2 非人称受動文

逆使役接辞と受身接辞は, 非人称受動文を作れるか否かにおいて明確な違いを見せる. サハ語では, 他動詞・自動詞の両方から非人称受動文を作ることが可能である (一般的な受動文を作ることにもできる. 詳しくは江畑 (2013) を参照されたい). 他動詞からの非人称受動文では, 元の対格目的語が対格のまま保持される. 非人称受動文について触れた先行研究 Ubrjatova *et al.* (1982: 268) および Vinokurova (2005: 336-338) で挙げられている例文は, すべて受身接辞-*ilin* を含むものであり, -*n* による非人称受動文の例は無い¹³.

¹¹ 他のチュルク諸語での受身接辞の形態は-*il* であり, サハ語のみが顕著に異なる接辞形態を有している. Xaritonov (1963: 110) などの先行研究において, サハ語の受身接辞-*ilin* は歴史的には, 受身接辞-*il* と再帰接辞-*in* の 2 つの接辞の合成により生じたとされている.

¹² 3.1 節および 3.2 節で行ったテストに関して, 受身接辞-*ilin* は次のように振る舞う. 語幹末子音の交替に関しては再帰接辞同様に振る舞う: *uur-ulun* 「置かれる」 (< *uur* 「置く」), *muññ-ulun* 「集められる」 (< *mus* 「集める」). 受身動詞はすべて母音脱落語幹となる: *ah-ulun* (*ahull-ar*) 「開けられる」. 受身接辞は他のボイス接辞に後続可能である: *kör-dör-ülün* 「見せられる」 (見る-CAUS-PASS).

¹³ 江畑 (2012: 106) や江畑 (2013) ではこのような事実に基づき, 異形態-*n* をもはや受身接辞の異形態とは見なさない立場からの記述を行った.

- (10) *sonun-nar-u* *aaɁ-**ulun**-na*
 ニュース-PL-ACC 読む-PASS-N.PST:3SG
 「ニュースが読まれた」

- (11) *massuuuna-nan* *ikki* *suukka-nan* *tij-**ill**-er*
 車-INST 2 丸一日-INST 着く-PASS-PRS:3SG
 「[そこには] 車で2昼夜で着く」

一方で *aha-n* 「食べられる」, *xolbo-n* 「つながる」, *de-n* 「言われる」などの逆使役動詞は、非人称受動文で用いられることは無い（これらの動詞も Ubrjatova *et al.* (1982: 265) においては受身の例として挙げられている）。例えば、(12)の主語 *as* 「食べ物」に対格接辞を付加し非人称受動文を作ることには出来ない。従って従来は受動文として解釈された(12)のような文を、筆者は逆使役動詞の文として解釈する（ここで逆使役接辞が *-m* で現れているのは逆行同化規則によるものである）。

- (12) *manna* *ütiiö* *as* *aha-**m**-makka* *tur-ar*
 ここで 良い 食べ物 食べる-ANTI-NEG:CVB AUX-PRS:3SG
 「この地方では良質の食料が食されていない」

5. 再帰接辞・逆使役接辞・受身接辞の振る舞いの違い

本稿の結論は、表3にまとめられる。従来の説明とは異なり、これまで扱ってきた諸形式を再帰接辞-*(i)n*・逆使役接辞-*(i)n*・受身接辞-*ilin* という3つの形態素に分けることにより、当該形式の意味の違いに応じて形態音韻的・形態的・統語的な特徴を矛盾なく説明することが可能になった。

【表3】 3つの形態素の特徴

形態音韻法	語幹末/r/保存 [2] 語幹末/s/交替 母音脱落なし [6.5]	語幹末/r/交替 語幹末/s/保存 母音脱落あり	語幹末/r/保存 [2] 語幹末/s/交替 母音脱落あり
形態素配列	ボイス接辞に後続可能	常に語幹の直後	ボイス接辞に後続可能
統語法	対格目的語取れる 自動詞にも付加する	対格目的語不可 自動詞には付加しない	非人称受動可能 自動詞にも付加する
意味	再帰	逆使役（自動詞化）	受身
筆者の解釈	再帰接辞 -<i>(i)n</i>	逆使役接辞 -<i>(i)n</i>	受身接辞 -<i>ilin</i>
従来の見方	再帰接辞 - <i>(i)n</i>		受身接辞 - <i>n</i> / - <i>ilin</i>

[] 内に示したのは例外の数（揺れが見られる例は0.5として計算）

表3中に [] で示したように、形態音韻法には若干数の例外がある。数が少ないことに

加えて、以下の2つの理由により、これら例外の存在は筆者の結論にとって大きな問題とはならないと考える。第1に、例外が見られるのは形態音韻法に限られており、形態素配列や統語法には今のところ例外が無い。第2に、逆使役接辞に見られる形態音韻法が例外的に再帰接辞あるいは受身接辞に観察されることはあるが、その逆のケースは存在しない。言い換えれば、例外は一方向的にしか発生していない。

6. チュルク諸語の再帰

チュルク諸語に共通の同根形式として、再帰接辞-*(i)n*がある (Salo 2013)。サハ語の再帰接辞は、2つの点で他の多くのチュルク諸語とは異なる特徴を持っている。第1に、チュルク諸語の再帰接辞は生産性が低い(トルコ語について Göksel and Kerslake (2005: 76) に、ウズベク語について Boeschoten (1998: 364) に指摘がある)。第2に、チュルク諸語における再帰動詞は自動詞を派生するものとして記述され、ごく稀にしか対格目的語を取らない(トルコ語について Göksel and Kerslake (2005: 153) に、トルクメン語について Clark (1998: 532) に指摘がある)。

サハ語の再帰接辞は生産性が高く(3.2節)、項の増減に直接影響を与えるものではない(3.3節)。サハ語において同音形式である再帰接辞と逆使役接辞のうち、他の多くのチュルク諸語の再帰接辞と機能の面で同様の働きを持つのはむしろ逆使役接辞の方であると言える¹⁴。

7. まとめ

本稿では、従来の考えでは再帰接辞および受身接辞とされてきた諸形式について、3つの形態素(再帰接辞-*(i)n*、逆使役接辞-*(i)n*、受身接辞-*ilin*)として分析すべきであると主張した。この主張を支持する点として、接辞の意味と、その形態音韻的・形態的・統語的な振る舞いとが対応していることを示した。この新たな分析により、見かけ上同音形式の4つのペアにおける振る舞いの違いが、含まれるボイス接辞の違いにより説明できることになった。

再帰接辞と逆使役接辞は同音形式であるが、3つの点で形態音韻的な振る舞いが異なる。加えて再帰接辞のみが他のボイス接辞に後続可能であり、再帰動詞には対格目的語を取れるという特徴があることを指摘した。従来は受身接辞の異形態とされてきた-*n*は、逆使役接辞の異形態として分析すべきであると主張した。その根拠として、受身接辞-*ilin*のみが他動詞からの非人称受動文において用いられることを指摘した。

チュルク諸語には共通の同根形式として、再帰接辞-*(i)n*がある。サハ語において同音形式である再帰接辞と逆使役接辞のうち、他の多くのチュルク諸語の再帰接辞同様の働きを持つのは、むしろ逆使役接辞の方である。

¹⁴ ただし Ohsaki (2008) は、英雄叙事詩『マナス』におけるキルギス語では、再帰動詞が対格目的語を取ることもあること、再帰接辞が自動詞にも付加することを指摘している(大崎氏自身の御教示による)。同様の特徴はトゥバ語にも観察され、例えば Kuular (2007: 1173) には再帰動詞が対格目的語を取る例がある。対格目的語との共起や自動詞への付加に関して、チュルク諸語の間でどの程度の生産性の違いがあるのかを明らかにすることは、今後の課題としたい。

略号

ACC	対格	INST	具格	PRS	現在
ANTI	逆使役	NEG	否定	REC	相互共同
AUX	補助動詞	N.PST	近過去	REFL	再帰
CAUS	使役	PASS	受身	R.PST	結果過去
CVB	副動詞	PL	複数	SG	単数

参考文献

- 江畑 冬生 (2012) 『サハ語名詞類の研究 —接辞法と統語機能を中心に—』 東京大学博士論文。
- 江畑 冬生 (2013) 「サハ語の使役文と受動文 —二重対格使役文と非人称受動文を中心に—」 『北方人文研究』 6号, 65-81.
- Boeschoten, Hendrik. (1998) Uzbek. Lars Johanson and Éva Ágnes Csató. (eds.) *The Turkic languages*. 357-378. London: Routledge.
- Clark, Larry. (1998) *Turkmen reference grammar*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Dixon, R.M.W. (2012) *Basic linguistic theory. vol.3. Further grammatical topics*. Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, R.M.W. and Alexandra Y. Aikhenvald. (2000) Introduction. R.M.W. Dixon and Alexandra Y. Aikhenvald. (eds.) *Changing valency*. 1-29. Cambridge: Cambridge University Press.
- Geniušienė, Emma. (1987) *The typology of reflexives*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Göksel, Asli. and Celia Kerslake. (2005) *Turkish. A comprehensive grammar*. London/New York: Routledge.
- Kazenin, Konstantin I. (2001) Verbal reflexives and the middle voice. Martin Haspelmath, et al. (eds.) *Language typology and language universals. vol. 2*. 916-927. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Kuular, Klara B. (2007) Reciprocals, sociatives, comitatives, and assistives in Tuvan. V.P. Nedjalkov. (ed.) *Typology of reciprocal constructions*. 1163-1229. Amsterdam: John Benjamins.
- Ohsaki, Noriko. (2008) The functions of reflexive verbs in Kyrgyz language used in the Manas Epos. Fujishiro Setsu and Shōgaito Masahiro (eds.) *Dynamics in Eurasian Languages*. (CSEL Series 14). 1-29. Kobe: Department of Human Science Studies, Kobe City College of Nursing.
- Pekarskij, E.K. (1907-1930) *Slovar 'jakutskogo jazyka*. St. Peterburg: Nauka.
- Salo, Merja. (2013) Deverbal reflexive and passive in Chuvash. *Journal de la Société Finno-Ougrienne*. 94, 223-254.
- Ubrjatova, E.I., et al. (eds.) (1982) *Grammatika sovremennogo jakutskogo literaturnogo jazyka. Fonetika i morfologija*. Moskva: Nauka.
- Vinokurova, Nadezhda. (2005) *Lexical categories and argument structure. A study with reference to Sakha*. Utrecht: LOT.
- Xaritonov, L.N. (1947) *Sovremennyj jakutskij jazyk*. Jakutsk: Gosizdat JaASSR.
- Xaritonov, L.N. (1963) *Zalogovye formy glagola v jakutskom jazyke*. Moskva/Leningrad: Nauka.

Reflexive, Anticausative, and Passive Suffixes in Sakha (Yakut)

Fuyuki EBATA
(Niigata University)

It is supposed that there are two allomorphs of the reflexive suffix and also two allomorphs of the passive suffix in Sakha. Contrary to this traditional explanation, this paper provides a new analysis: The author argues that the reflexive, the anticausative, and the passive suffixes should be distinguished as distinct morphemes.

The reflexive suffix and the anticausative suffix show semantic differences as well as morphophonological, morphotactic, and syntactic differences in a consistent way. The anticausative suffix and the passive suffix should be distinguished since impersonal passive constructions are possible only with the passive suffix.

Turkic languages have a cognate reflexive suffix *-(i)n* in common. Judging from their behavior, however, it is not the reflexive suffix but the anticausative suffix that is similar to the reflexive suffix of most other Turkic languages.

(えばた・ふゆき ebata@human.niigata-u.ac.jp)